



Hungry spirit:body,narrative and performance in the world of Japanese boxing

Loren, Seth Goodman

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2005-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲3295

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1003295>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



【 195 】

氏 名・(本 籍)	LOREN SETH GOODMAN	(アメリカ合衆国)
博士の専攻分野の名称	博士(学術)	
学 位 記 番 号	博い第531号	
学位授与の 要 件	学位規則第5条第1項該当	
学位授与の 日 付	平成17年3月25日	

【 学位論文題目 】

Hungry Spirit:Body, Narrative and Performance
in the World of Japanese Boxing
(ハングリー精神 —日本ボクシングの世界
における身体、語りそしてパフォーマンス—)

審 査 委 員

主 査 教 授 油井 清光
教 授 佐々木 衛
助教授 白鳥 義彦

本論文は、主に参与観察とインタビューの手法により、日本ボクシング界の実態を調査し、そのデータや資料の上に、社会学的枠組みによる分析を加えて構成したものである。

学位申請者はこれまでに、大阪、神戸、東京など各地のボクシング・ジムを訪れ、また自らジムのメンバーとなりながら、インタビューと参与観察を繰り返してきた。その間に集積されたフィールド・ノートや、録音テープは、膨大な量にのぼる。これらのデータの整理・分類から、実態として、どのようなことが日本ボクシングを考えるにあたって、特徴的観点となりうるかを解析してきた。同時に、この作業は社会学的理論枠組みとの関連を模索する理論研究の作業とも並行して行われた。

本論文は全体として次のような構成をとって展開されている。

1章「比較研究——日本とアメリカのボクサーたち」では、①語りのスタイル、②日米のボクシング・ジムの制度的・組織的相違の比較研究、③ボクサーの身体、④経済的諸要因、⑤訓練方法、という諸主題が取り上げられる。①の語りのスタイルでは、物語あるいは物語る行為における「私」の位置や「自我という概念」について検討される。②では、日米でのジムの広さの比較や、ボクシング組織の比較、アマチュアの位置づけの相違、メディアとの関連などが、分析される。③では、ボクサーの体格の差異、ボクサーの身体がいかに造られるか、ということ、さらには、身体比較における「ステレオタイプ」という重要な論点が論述される。④では、ボクシングにおける「世界市場」という主題や、アルバイトとの関連の実態、などが分析される。⑤では、減量、ジム間の争い、トレーナーの位置づけやオーヴァートレーニングといった論点が主題化される。

2章「神話、原型そして基礎付け物語」では、①日本における現代の英雄としてのボクサー、②日本におけるボクシングの集合意識、③「あしたのジョー」、④メディアによる英雄の生産、といった諸論点が主題化される。①では、現代のボクサーたち自身の語りの根底にあると見られる、ボクサーという英雄像について論じられる。②では、ハングリー精神に基づく肉体訓練ということがいかにボクサーないしボクサー志願の若者たちにとっての儀礼化された「集合精神」になっているかが検討される。③では、こうした語りにはいかに基礎付けとなる物語を与えたものと解釈できる漫画「あしたのジョー」が主題化される。④では、日本のテレビにおけるボクシング中継という「儀礼」やテレビ・ドラマに見るボクシング像が分析される。

3章「歴史的・文化的文脈における日本ボクシング」では、①歴史的な文脈、②日本における他の武術やスポーツとの関連から見たボクシング、③小さな巨人—事例研究、といった諸論点が主題化される。①では、日本ボクシングの起源、年代ごとの推移の分析、今日のボクサー自身がそれらをどう見ているか、が検討される。②では、ボクシングは日本ではメジャーなスポーツなのかどうかという基本的問題から、外国人の手本という点からボクシングとその他のスポーツとの相違などの諸論点の検討にいたる。③では、日本ボクサーのウェイト階級やパワー・ボクシングの問題、輪島、横崎などの事例研究が論述される。

4章「一つの血——『同質社会』日本のボクシング界をとおして見た民族的純粋性という神話」では、①地域的差異、②エスニックな差異といった主題が論述される。①では、日本国内での東と西の違い、大阪対東京、その歴史や地理的分布といった問題が取り上げられる。②は、重要な項目であり、1. 沖縄出身の人々、2. 在日、3. 「ハーフ」、4. 外国人、5. 一時滞在者、6. 米軍軍属、などといったさまざまな背景をもつ「マイノリ

ティ」が分析の主題とされより踏み込んで論述される。

社会学的な理論枠組みとしては、主に近年、社会学の先端的な領域で取りあげられることの増えてきた「身体社会学」に関連する文献を多く用いている。ジョン・サッジェン (Sugden)、L.ワッカ (Wacquant)、B.ターナー (Turner) などである。例えば、ボクシングは「近代社会で許される最後の野蛮の実践」というサッジェンの観点や、「産業革命以降、ボクシングは常に政治や人種と関連付けられてきた経緯をもち、そのような背景から特定の試合に付与される象徴的重要性がスポーツの枠をはるかに凌ぐものとなる場合も多くなっている」といったワッカの視点などを出発点としている。ワッカからは、他にも、「身体資本」という概念や、「身体改造」とボクシングの実践、という観点も導入されている。さらに、そこでの基本的問題意識は、「ボクシング選手は、富と消費に象徴される現代のアメリカや日本の社会にあって、異質な存在として」じつは認識されている面があるという問題である。彼らのライフスタイルは、「自己犠牲と規律、そして独特の価値観・満足感にのっとった厳格な肉体改造を必要条件としたもの」であり、それがいかにして、この飽食と過剰消費の現代先進社会に存在しつづけているのか、ということが根底にある問題意識である。飢餓や空腹ということの実際上の意味と、それが今日の過剰消費社会の若者であるボクサーにとって持つ「儀礼的な意味」などが指摘され分析される。つまりここでは、本論文が表題とする、現代における「ハングリー精神」の存立の在りようとその謎が基本主題となっている。

また社会学のより「古典的」な理論枠組みからは、マーティンの「相対的剥奪」の概念とハングリー精神、準拠集団論、デュルケムの集合意識 (現代のヒーローとしてのボクサー) や儀礼論、マスコミ論、なども援用される。

さらに、主観的な実態分析としては、エスニシティとボクサー (ボクシング) との関係や、ステレオ・タイプされた外国人という身体分析が展開される。そこでは、単一民族説という日本の神話をふまえながら、様々な性質を異にするマイノリティー・グループが、日本ボクシングの世界にいかにか多く存在したその存在感を維持しているかが描かれる。

最後には、漫画「あしたのジョー」の分析をとおして、それまでの様々な主張がまとめられ、メディアや物語と現実的意識とのかかわり、歴史的展開への影響力や、構成力に言及する。

本論文では、フィールドワークによって集めた詳細なデータを、よりマクロな社会指標 (出身社会階級、ジムの運営管理システム、その経済基盤、ポピュラーな英雄像としてのボクサーなど) との関連でも分析している。調査手法の中心は、選手たち自身による自己という物語の「語り」の分析にあり、また、地域・民族的アイデンティティや、時代的・時代的相違の考察、ボクシング以外の格闘技 (例えば、柔道、空手、相撲など) との比較をも視野に入れているが、最終的には、日米比較という大枠のなかで論文全体は構成されている。

綿密な調査手法による第一次資料の収集と、それに対する、今日のさまざまな社会学理論による分析というアプローチを組み合わせ、相乗効果をあげるよう配置した。

以下に、主要部分についての要約的記述を付加する。

外国人の身体：日本のボクシングのステレオタイプとエスニシティ

世界のボクシング界を俯瞰すると、ボクシングというスポーツは労働者層や人種的マイノリティといった貧困・抑圧に苦しむ社会階層に属する人々が際立って活躍する場となっていることに気づかされる。翻って、同質的な単一民族から成り、貧困が消滅し、移民の数も著しく少ない日本のような国では、一体どのような人物が、どのようなきっかけでボクシングの世界に足を踏み入れるのであろうか。

社会学者たちの見解によると、特定の時代におけるスポーツの実態は、それがおこなわれる社会の健康度と健全性をはかるための指標であるといわれている。(Sugden 145) しながら、ボクシングに関しては、「近代社会で許される最後の野蛮の実践」であり、(Wacquant 16) 産業革命以前、そしてそれ以後の時代双方において人気を勝ち得ている唯一のスポーツ競技であると考えられている。(Sugden 9) ボクシングは競技面においては個人スポーツであるが、その修練過程は極めて団体的である。(Wacquant 100) 産業革命以降、ボクシングは常に政治や人種と関連付けられてきた経緯をもち、そのような背景から特定の試合に付与される象徴的重要性がスポーツの枠を遥かにしのぐものとなる場合も多くなっている。それと同時に、ボクシング選手は富と消費に象徴される現代のアメリカや日本の社会にあって、異質な存在として認識することが出来よう。ボクシング界のトップファイターは、世界中のスポーツ選手の中で最も高給を支払われてはいるが、その裏での彼らのライフスタイルは自己犠牲と規律、そして独特の価値観・満足感に則った厳格な肉体改造を必要条件としたものになっている。(Sugden 129) うつ病や傲慢、そして無意識な過剰消費の危険性と常に隣り合わせの飽食の社会に存在する我々は、ボクサーたちが持つ、生きることにないモチベーションと精神力から一体どのようなことを学びとることが出来るのであろうか。

I. 身体

『ボクシングと社会』(1996)の中で Sugden は以下のような結論付けをおこなっている。- 「ボクシングは深刻な社会的不平等を規定するグローバルな政治経済の文化的所産である。この論理に従うと、ボクシングが許容されない社会は、富の分配の平等な社会空間であると定義することができる。」- 現在の日本はそうした「平等社会」の典型例として認識することが出来るかもしれないが、ボクシングが急速に伝播した 1940 年代から 50 年代の日本にあっては、その事情はまったく異なっていた。1980 年代から 90 年代にかけて活躍した元東洋チャンピオン(日本チャンピオン)、坂本博之(「平成 KO キング」)は、家庭の事情などにより苦しい幼少時代を過ごしたため、社会的疎外感や「飢え」は常に所与として存在していた。それが坂本がボクサーとして成功をおさめるための大きな動機となったと考えられる。- 「坂本が小学校 2 年生のとき、母親が東京へ働きにでることになり、……遠い親戚に預けられた坂本と(弟の)直樹は、口に出る食事は学校の給食だけ、という生活になってしまったのだ……週末や夏休みには、その一食さえない。」- (岸田 63)

現代日本の若者は日常生活において食べることに全く事欠かないが、食べるものが十分にあることが全てを解決してくれるわけではない。アメリカの若者たちとは対照的に、日本の若者は「殺人や投獄、薬物濫用」(Wacquant)の悪の三拍子に直面することはないが、その一方で「無気力、無力感、無関心」といった精神面での危機と隣り合わせの日常を送っている。第 24 代日本スーパーフライ級王者佐々木真吾は「仕事の後、飲むかパチンコするかの毎日。このままじゃだめだ、ナニかやんなきゃいけないなと思っていた」と言う。(岸田 59)

プロボクサー近藤賢二が語るのは：「高校を出た後、事務の仕事が見つかって、毎日安定していた。でも、しばらくしたら、何故かわからないけど、何でもいから他のことをやりたくなったんだ。エネルギーをもてあましてたから、そのはけ口を見つけたくてボクサーになることに決めたんだ。」同様にプロボクサー来田さんは「なぜボクシングを？モノが足りない。不満だったんだ」と言う。

食と住が充足されれば、身体が欲するものの基本的な部分は満足する。その段階に達すると、人々は精神的な基本欲求を満たすために娯楽やレジャーの形態に意味づけを行うようになる。ボクサーの動機付けは時系列的な変化を遂げているが、生理的な空腹感よりも、精神的な欠乏感の影響力がより重要になってきていると考えられる。

英雄を生み出す舞台装置、ボクシングは身体を危険に晒すリスクの高いスポーツである。統計によると自動車レースや登山、ハンググライダーなどの競技ではボクシングよりも遥かに高い負傷率が記録されているが、ボクシングにおいて頭部に受けるパンチによるダメージの蓄積は誰もが危惧するものである。「ボクシングの存在理由は負傷と死なのである。」(Sugden 174) したがってボクシング選手達は、そのような条件に耐えうる独特な肉体を磨き上げるのである。フランス人の社会学者 Wacquant は、アメリカのボクシング界でエスノ

グラフィ的な研究を行い、「肉体的資本」の概念を主張するに到った。(Sugden 188)

同様に、我々はボクシング・ジムを肉体改造工場と定義つけることが出来よう。ボクシング・ジムは工場であり、また人間戦闘機械を製造する設備の整った「夢の生産基地」(Wacquant 240)でもある。この「生産基地」に足を踏み入れた人間は、自己の身体を生理的に変異させる生産プロセスを通過することになる。このプロセスが完遂すると、人間の身体は武器としての機能を研ぎ澄ましたそれへと再定義される。この肉体には移動時の所作やスタンスの取り方などが刷り込まれ、その拳は弾丸になり、また盾となる。ボクシングへの取り組みは、身体の非対称性を増幅させ、同時に現象もさせるのである。条件反射は中毒症状の如く鋭敏になる。

私が始めて日本のボクシング・ジムを始めて訪れたときの印象は、アメリカでの経験とは異なり、ほとんどの選手が小柄であったということである。私は瞬間的に、日本でのボクシングは小柄な人間のためのスポーツであると結論付けてしまった。

「小さいとき、野球プロ選手をやりたかったけど、身体が小さいから・・・ボクシングだったら、階級がある。だから、夢があれば、ボクシングが一番いいかなと思った。」「の場」

ボクシングは体重による階級わけがなされている唯一のプロ・スポーツである。日本人ボクサーの多くは、バンタム級(53.52k)とフェザー級(57.15k)の間の階級で競技を行っている。ボクシングにはミニマム(47.61k)からヘビー級(86.18k以上)にいたる17の階級があり、そのうち日本ボクシング協会が公認する最重量級はミドル級(72.57k)である。因みに日本国内で協議するプロのヘビー級選手は10人にも満たない。欧米ではミドル級が最も競技者の多い階級である。日本ボクシング協会関西局局長の角田氏によると、「フェザー級以上のクラスでは日本人ボクサーはてんであかん。」ということである。日本人ボクサーが(特に重量級の)外国人ボクサーに対して抱く身体的劣等感、相対的剥奪意識の典型的な例である。(Merton 282-3)

私がこのことに関して、例えば「なぜ日本人の中量級ボクサーは国際舞台で活躍できないのか」という問いを投げかけると、なぜか民話めいた答えが返ってくるのである。以下それらを記述するが、私はこれら一連のやり取りを「松田神話」と名付けることにした。

「大きくなると、日本人は筋肉と骨が重くて遅くなる。われわれ日本人は黒人と違ってスピードがない。黒人は貧しいところに生まれるから、神様が恵まれた身体をあたえるんや。」

アメリカでその競技生活のほとんどの期間を過ごした日本人ボクサー、サンディーは、同じ質問に対して異なる見解を示している。

「ああ。黒人はバネみたいな筋肉を持っていて、力も強い、鞭みたいに、とみんな言っているけど、全ての黒人がそういうわけじゃあない。で、白人はがっちりしてて頑丈だといわれているけど。けど、それは人それぞれ。マーヴィン・ハグラーは鞭みたいな筋肉じゃなかったしー彼はどっちかって言うと丈夫で固いタイプで、典型的な白人ボクサーの身体だった。デュラン、あいつは・・・人種はラテンだけど、奴はどちらかっていうとアジア人ばい身体してた。それでも強くなった。だから結局は個人個人ってこと・・・」

「あと、人種的な特徴だって時代が経てば変わるでしょう。確か20年か30年前まで、韓国人は四角い頭してて、すごい固かったんだ。で、打たれ強い。でも、それは昔の話・・・。若い世代の韓国人の頭は丸くなってるし。ライフスタイルとか食べ物のせいもあるかもしれない。今の日本も同じでしょ。子供どんどん大きくなってきてるけど、だからって強くなってるとてもない。戦後直後の日本では、種みたいなゴミでもなんでも、とりあえず食べないとやっていけなかった。他にになにも食べるものなかったし。それでもみんな病気になるたりしなかった。みんな強かったんだね。身体は小さいけど、彼らの手の親指は分厚いし、骨も強いんだわ。」

しかしながら日本人の若者の体格が大柄になるにつれて、肉体的に脆弱になると感じている人間も多い。食生活とライフスタイルの変化が大きな身体を作り出すようになったが、骨の強度や免疫システムは従来の日本人のものから進化していないため、日本人が大きな体格になるのは不自然なことである。これが彼らの言い分である。数少ない日本人ヘビー級ボクサーの市川氏は、「俺の身体は丈夫。骨付きは今の若い日本人みたいじゃない。昔の日本人のみたいに丈夫。」

(市川)

日本人の身体と「松田神話」に表現されているような日本人の精神について考えるうちに、私は日本のボクシング界における人種と民族という概念について更なる探求をおこなうことになった。最も面白いボクシングの試合はしばしば日本人ボクサーが外国人ボクサーと対戦する時である。ボクシングの舞台のダイナミズムが突然変化するのだ。たとえば、会場の観客が突然沈黙し、その場に異様な静けさが漂ってきたりする。日本のボクシング界に入り込むほどそれがよく見えるようになってきた。

II. エスニシティ

来日前、私が抱いていた日本に対するイメージは単一民族からなる国家という印象であった。しかしながら、この国に於けるボクシングの世界にどっぷり浸かり関西の街に暮らすことを通じてそのイメージは大きく覆されることになった。単一民族国家のイメージとは裏腹に日本には多様な民族的、人種的背景を持ったマイノリティが存在するのである。アメリカに於ける人種多様性のケースとは対比的に、日本に於けるそれは肌の色などの外見的特徴から判断することが極めて困難である。日本のマイノリティ社会に属する人々は、恒常的に自らの相違を隠蔽し、一般社会に同質化する試みを行ってきた。そのため、

日本の社会にはマイノリティが実際には存在しながらもそれは「目に見えない」性格を持ったものとして形成されている。

社会現象、そして自己表現方法としてのボクシングの研究を行うことを通じて、私はそのような日本に於ける人種的多様性に対して問題意識を持ち、新たな研究課題として取り組むことになった。日本のプロボクシング界ではマイノリティ社会の出自を持つ選手、トレーナー、あるいはボクシングジム経営者「会長」が占める割合が著しく高く、その影響力も非常に大きいと考えられる。たとえば、在日韓国・朝鮮人人口総数は約70万から100万人であり日本の総人口の0.6から0.8パーセントに過ぎないが、関西地区に本部を持つボクシングジムの約三分の一は在日韓国・朝鮮人によって運営されている。(Table 1)

沖繩出身者についてもこれと同様の考察を行うことが出来る。「沖繩人」の総数は160万人と日本の総人口の1パーセント強を数えるに過ぎないが、日本が輩出した47人のプロボクシング世界チャンピオンのうち6名(13パーセント)が「沖繩人」となっている。

在日韓国・朝鮮人及び在日中国人を除いた在日外国人人口は約15万から70万人と言われており、これは総人口の0.1から0.6パーセントに過ぎないが、そんな中から三人の世界チャンピオン(6.4%)、106人の東洋太平洋チャンピオンのうち4人(3.8%)、そして339人の歴代日本チャンピオンのうち23人(6.7%)が誕生しているのは顕著である。(Lie 4)

日本社会に於ける有力ボクサーにマイノリティ社会出身者が多いという事実はアメリカを始めとする各国に於けるデータと一貫性を持っている。しかしながら、上記のとおりここで強調したいのは日本のマイノリティは他国のそれとは異なり「目に見えない」ものであり、それはプロボクシングの世界でも同様である。なぜ日本のマイノリティはボクシング界にそれほど深く根を下ろし、そして成功を収めてきたのであろうか？また、それは日本の社会について何らかの事実を説明する現象なのであろうか？この研究では日本のプロボクシングと人種の関係性について主に七つのグループを設定し、議論を進めてゆくものとする。在日韓国・朝鮮人、「沖繩人」、アイヌ、被差別部落出身者、「ハーフ」、「輸入ボクサー」、と米軍ボクサー。本稿ではそのうちの在日韓国・朝鮮人(以下「在日」)、「沖繩人」及び被差別部落出身者の三グループに焦点を当ててゆく。

物理的な空腹はもはやボクシングへの入り口にはならないが、ボクサーたちは自己憔悴的な減量プロセスにおいてその空腹感を儀式的な形式で内面化している。空腹はボクシングとは切っても切れない関係を持っている。ジャック・ロンドンの『一切れのステーキ』では主人公が一切れの肉を買う余裕がなかったために栄養失調になり、僅差で敗れた。ロッキーでは、冷凍庫に吊るされている大きな牛の腹部をサンドバッグ代わりにし、ロードワークに発つ前には生卵6個の朝食を流し込んでいた。

終戦後の日本の貧困で逼迫した状況では、飢えという言葉は特別な響きをもっていたが、

経済状況や社会環境が大きく変わった現在でも、決してその意味が薄まることはない。いわば人々の心に埋め込まれたような存在である。

「新しい人と出会うとき、向うが俺はボクサーというのに気づくと、『ああ！減量は厳しいんじゃないですか！』とかいつも言われる。まあ、ね、それはあるけど、ボクシングって減量だけじゃないでしょう。」(玉越)

私は数多くの人々に「なぜ在日や『沖繩人』はボクシングの世界での活躍がめだつのか」という問いを投げかけたが、決まって返ってくる答えがひとつあった。それはハングリー精神である。

「ハングリーだから。本気でやるから。日本人の中では本気でやっていない人も多い。やってみただけ。やっぱり朝鮮民族と琉球民族は差別されるからハングリー。やっぱり普通の日本人みたいに何でも仕事を出来たり。何でも自由に出来ないから、日本で。選ぶ・・・選択の余地は少ないから。(千里馬)

Lieの「他民族国家日本」(Multi-Ethnic Japan)の中では、以下のような議論が試みられている。Lieによれば、日本は1960年代初めから多民族性を否定する政策をとってきたという。(Lie 50)「日本が帝国主義国家であった時代、支配的な思想は単一民族主義ではなく、多民族主義に立脚したものであった。・・・そして日本における多民族主義が突然否定されるようになったのは戦後のことである。」(Lie 125)日本は多様性と複雑性に満ちた有機的近代社会としての性格を持っているが、国家としての日本はデュルケームが「機械的連帯」と呼ぶような同質性に基づいた社会であるとの自己イメージを醸成する作業を行っている。(Lie 50)こうした国家的政策は、帝国主義時代に日本がおこなった朝鮮人や「沖繩人」に対する暴力や搾取という歴史的事実とあいまって、人種差別や搾取が発生する十分な土壌を形成しているといえよう(つまり帝国主義時代にはイデオロギーとしては「多民族主義」であったが、それは事実上、朝鮮人や「沖繩人」に対する暴力や搾取を正当化するイデオロギーだったのであり、他方、現代の日本では「同質社会」のイデオロギーの下、「見えない差別」が展開しているといえよう)。これは、Sudgenが「搾取と犯罪の臭いに満ちた環境」と表現する現象と類似した状況であり、「ハングリーファイター」の良心を形作るための環境がそろっているということでもある。(Sudgen 125)さらに、ボクサーが自分自身のアイデンティティと本名を明らかにする意思決定は、Lieの言うところの「マイノリティが自身のアイデンティティや文化を隠蔽し、本名をも隠さなければならないことに非常に精神的苦痛を味わっている」状況においては、著しい重要性を持っている。(Lie 171)

「僕の場合は、ボクシングをやるきっかけは、ただ運動のため。なぜ自分の本名でやって言われたら、何も悪いことはないと思った。隠すことはないと思っていたから。千里馬啓徳。金啓徳。別に何にも言われていない。言われたかもしらんけど、気にしない。言われていない。」

「根性は負けないと思ったね。なぜ。自然と。ここは、まあ、自分の国ではない、生まれたけど。だから頑張らんとね。人よりも頑張らんと。」

「勝ちたいという気持ちが強いかも、日本人より。歴史的にいっぱい、侵略されたり。」

「ぼくはアメリカに修行しにいても、あまりアメリカのボクサーの強さ感じなかった。僕の方が強いんちゃうかなと思った。自分のほうがつよい。アイアムナンバーワン！」(千里馬)

このインタビューの前半、私は彼にこれまで差別を経験したことがあるかどうか尋ねてみた。かれは「はい」といって頷いたが、その後再度同じ質問を投げかけたところ、彼は考えながら次のように言った。

「ない！ない！ない！『はい』と言うっても、自分に負ける。自分に勝つから。そんなこと、差別されたって言うて、今言うても何もならない。」(千里馬)

千里馬の妻、玉マネージャーはさらに続けた。

「会長が選手の時に、その在日だって言っていた、はつきり。だら、会長は、すごい大きな影響与えている。自分が在日だとアピールしたのは会長が始めてだった。いまは本名でやっている人が増えてきた。あの時、80年代、と状態が全然違う。まだ反共とか・・・あの時はいろいろな問題があった、コリアン同士でも。今はコミュニケーションを取って、仲良くして、国の統一のために、でも、あのときはまだ対立して・・・

・・・会長がよくテレビ出ていたからね、ぜんこくね。そしたら『千里馬啓徳！』と書いているのがあったの、誰が見ても『北系』ってわかる、皆がプライドを持って。でも、いろいろあった、ね。在日のボクサーが多いけど、ジャッジとレフェリーはみな日本人でしょう。ボクシングにいっぱいいるよ、在日の人。野球も。でも、プラスにならないから、ほとんどの人が本名を隠している。

あの当時も暴力団とか右翼があって、会長が大阪で試合があったら、落ち着いて試合を見ることは出来なかった。いつも誰かが後ろから襲ってくる不安があったから。

なぜ在日がボクシングをやる？ハングリーだから。たとえば、アメリカで、黒人は差別されるでしょう。もっと頑張らなかつたら、白人より、何もできないでしょう。在日はアメリカの黒人といっしょ。私たちの国が植民地にされて、無理やり韓国から・・・もう、何も残っていない、韓国に。で、日本には、またゼロから。そういう人だったら普通の根

性では足りないじゃない？」(玉)

ハングリー精神と民族のプライドは、千里馬氏の影響を受けたと思われる現在ただ一人の日本生まれの世界チャンピオン、徳山昌守にとっても同様な重要性を持っている。そう語るのは徳山選手の父である。

「子供たちが生まれたときから、民族の誇りをもって生きて育てた。民族心というのは大きくなってから身につけるものではなく、生まれたときから徹底的に植えつけるもの。」(康 181)

徳山選手は東京に生まれ育ち、家庭環境にも恵まれていたが、彼はハングリー精神を維持するために、高校卒業後、単身大阪に発ち、プロボクサーとしての道を歩み始めた。(康 185)

彼の父親は語る。

「日本人も朝鮮人も能力は同じ。ただ、どういう環境に恵まれて才能を発揮するかが違う。息子は高校、日本の大会にまったく出られなかった。そういうハングリー精神が世界チャンピオンにつながった。」(康 188-9)

世界戦に勝利した後、徳山選手は北朝鮮政府から最も名誉のあるといわれる二つの勲章を授与された。彼の肖像は郵便切手のモチーフにもなった。

自分に対する厳しさが半端じゃない。自分が勝つことによって、朝鮮人の価値が上がることを強く意識している。やはり、民族意識の中身が違う。個人的に彼に強くひかれるのは、世界チャンピオンになったからではなく、自分が子供たちに教えてきた民族意識をはつきりと示してくれたから。(康 190)

徳山選手自身はこのように説明している。

「在日だからどうこうじゃない。はっきり言って、ボクシングという競技に在日うんぬんは関係ないと思う。逆に、在日がボクシングをやったらみんな成功するかといえば、そんなことはない。」(康 191)

千里馬氏の言葉を繰り返すように、徳山選手の父親は考えを述べる。

「朝鮮人というのは自分より強いものを認めたくないんだ。私自身がそうだった。勝負には絶対勝つ。それが民族の心だ。今は、朝鮮半島にいた朝鮮民族が、何かの事情で日本に来ているだけ。心は常に朝鮮半島にある。なぜ在日がスポーツで強いのか。その答えは

朝鮮半島にあり。それに尽きる。」(康 192)

在日および「沖縄人」ボクサーの間では、ハングリー精神という概念は相対的剥奪感と強い連関を持っている。元世界チャンピオンで「沖縄人」の浜田剛は3つの例を挙げている。彼は、まずボクシングの国際舞台における日本人ボクサーが身体的に劣位であることを語っているが、これは「松田神話」とも一貫性を持っている。

「ああ、アメリカ人の身体が違う。特に黒人。黒人と白人ボクサーが違う。まあ一、黒人がボクシングに向いているかな。バネがあるから。勝つために日本人は倍ぐらの練習をしなければならない。相手と同じ練習だったら勝つのは絶対無理。」(浜田)

2つ目は、「『沖縄人』ボクサーは日本本土出身のボクサーに対し、肉体的優位性を備えているのか」という私の質問に対する彼の回答である。彼の答えは、本土と沖縄の間の収入格差や生活水準の開きを明らかにするものである。(浜田が語ったのは彼自身の子供時代のことであり、現在では沖縄と本土の間の経済的格差は縮小している。)

「20年30年前はそれはそうだったけど、今は沖縄はだいぶ変わってきた。僕の子供の時代と違う。今の子供は違うから、そんなに強くないと思う、日本人よりも。遊び方が違う。僕らのときは遊び方が違うふうだった。もっと自然だった。いつも丘を走り回ったり、木に登ったり、みかんを取りにいったり。時々誰かは落ちたけど、またただ立ち上がっただけ、大丈夫だった。今頃の子供だったら、落ちたら、怪我する。」

「いつも競争をやっていた。誰が一番強い。誰が一番早い。一番タフな人。いつも喧嘩して、誰が一番強いかを決める。だから僕は子供のころから喧嘩をやっている、ね。今の子供は違う。テレビだからな。」(浜田)

3つめは揺れ動く民族としての視点である。「沖縄人」・在日はかつては自らの国家の支配者であったが、その後植民地化され、さらに短期間のうちに数度にわたって再植民地化される経験をしたため、(特に在日のケースでは)国や国家に帰属することの出来ない在日が生まれるにいたった。

「前はドルだった。もし、本島に行きたかったら、パスポートをとらなければならない。本島に電話をかけるんだったら、国際電話だった。ただいつでもかけることは出来なかった。申し込みをしなければなかった。朝に申し込みをして、夜に電話をかけることができるようになった。こういうのはすべて1972年に変わった。」(浜田)

もう一人の「沖縄人」元世界チャンピオン平仲会長は、「沖縄人」で世界チャンピオンになった6名のうちただ一人沖縄にあるジムに所属していた人物であるが、氏は「ハングリー精神」を沖縄名物として認識している。

「いっぱい、いろいろあったけど、毎日頑張っていた。沖縄だったらハングリーでしょう？たとえば、スパーリングない。マネーない。マネージャーない。ジムない。いつも寂しい。すごくハングリー。アジア大会のチャンピオンだった、俺は。ゴールドメダリスト。高校チャンピオン。だからいつもアレンジ、いつも考え、トレーニング。いつもマイペース。沖縄は寂しかった。スパーリングパートナーない。何もなし。今ジムいっぱいある。あの時はひとつだけだった、沖縄ジム。まだある。」

孤独感、空腹感、あるいは十分なトレーニング環境の欠如が、彼のハングリー精神を過剰に刺激したため、平仲会長は過剰なトレーニングの結果、深刻な病気を患うにいたった。

「イタリアでアフアン・コッジとやった。四回に倒した・・・本当は勝ったけど、採点は負けた。プーイングいっぱいあった。でも、考えていって、ああ、少しアレンジしたら、トレーニングを、スパーと、次は勝つ。自信あった。」

「日本に帰ってきて、それから、オーバートレーニング。血が悪くなった。毎朝15kを走って。昼を食べてからウエイトトレーニング、で、また走る。夜はスパーリング、と20kを走る。だから毎日60kを走っていた。僕はハートが小さいからいつもトレーニング。」(平仲)

もう一人の「沖縄人」元世界チャンピオンの上原氏は、類似した現象を語っている。

「声がかかったのはなんと本番の3週間前だった。『決まっただけからはキャンプで一日30キロ以上走ったり、スパーリングも一日20ラウンドのメニューを一週間続けた。後輩たちは《上原さんはオカシイ。頭が変になっちゃたんじゃないか》って言ってましたけどね。今の女房なんだけど、あの試合のために会社を辞めてきてくれたんですよ。オレもそうだけど、彼女も人生をかけていたんだろうね。」(原 190-1)

90%の日本人は自らが中流階級に属すると認識しており、日本人全体としても「階級のない平等な」社会という意識を持つ比率が顕著である。しかしながら、実際のところ日本は相当な階級社会である。日本における民族の言説を議論するうえで困難なのは、日本人は民族、人種、そしてナショナリティという3つの概念を混同しがちであるということである。日本では民族性が人種的な要素と関係付けられることがしばしば起こる。(Lie 47) 在日や「沖縄人」とは対照的に、一般的に日本人が抱く「被差別部落出身者」に対するイメージは封建時代の日本における階級制度の最下層に属した階級が従事していた職業に由来するものである。「被差別部落出身者」は人種的には「一般の」日本人と何ら異なることはないが、多くの日本人は「準人間的なイメージ」を作り出し、彼らがあたかもあばら骨が一本足りない人種であるとか、犬の骨をもった人種である、あるいは彼らには影がない、彼らの足の裏にはごみや塵が付着しない、などといったさまざまな寓話化の試みがなされている。(Lie 86)

私はこの研究の過程において、日本の有力ボクサーの間には「被差別部落出身者」が顕著に見られるという事実と遭遇し、その事実を確認するために或る研究所に足を運んだ。私は、同研究所関係者へのヒアリングをおこない、私が持参した歴代チャンピオンリストの中で、どの人物が「被差別部落出身者」であるか尋ねてみた。するとその人は、(特にリスト上の人物を意識していないかの素振り)「私は何人かの『被差別部落出身』ボクサーを知っていますが、あなたにお話しするわけにはいきません。もし私があなたにお話ししたところで、マイナスのことが生じるだけですから。」とおっしゃった。この経験を通じて、民族性という概念に関する私の考え方が変化することになった。その方は、その後「被差別部落」の歴史を私に解説してくださり、人々が抱く「被差別部落」に対する固着したイメージ(猿回しをし、おかゆやぼっかけうどんやホルモンを食べ、癖のある言葉を話すなど、「被差別部落」に限らずこの下町にも見られるような風景)について語ってくださった。彼はさらに続ける。若い世代の日本人の間では「被差別部落」に対する偏見がなくなってきている。そう考えると、時間の推移とともにこの問題の根が浅くなり、最終的に消滅するまで待つのが最適な対応策ではないだろうか。

III. 「ジョー」、結論

日本の中の民族的多様性を最も端的に語っているのが漫画である。著名な野球漫画『巨人の星』は「被差別部落出身者」の解放を象徴したものと解釈することが出来る。(Lie 59) 「沖縄人」によって描かれた『ウルトラマン』は米軍による沖縄占領のアレゴリーであった。(L 69) 日本でもっとも知られているボクシング漫画『あしたのジョー』は日本人の間でボクシングが認識されるきっかけを与えたばかりではなく、日本人ボクサーにも多大な影響を及ぼした。私は『あしたのジョー』、そしておそらくはボクシングそのものも、日本という国の西洋化のアレゴリーではないかと考えている。

『あしたのジョー』の中では、外国人の様々な人種のステレオタイプがどのようにして形作られるかが明快に描かれている。彼の韓国人名「キムリュウヒ」は、彼の冷酷さと強さが彼の幼少期における戦争体験に起因するものであることを示している。(Fig. I) 彼がタイ人のボクサー(ウスマン・ソムキット)(Fig. II)を意図も簡単に打ち破ったのは、ジョーのボクシング(西洋のボクシング)がアジアのボクシングに対して圧倒的な優位性を持つことを証明する事実であった。最後に彼が直面することになったハリマオ(Fig. III)はブッシュマン的な残酷なキャラクターであったが、これは決して偶然ではなく、西洋化に成功するために自身のアジア性を除去するというシナリオの中では当然の帰結であるといえる。

ボクシングとその背景にある社会の間には「非対称な」関係が存在する。(Sugden 178) 医師になりたい若者は医学部を目指して勉強するが、一方ボクサーを目指す若者には、ただ剥奪感が埋め込まれた環境に身をおくことのみが必要なのである。

日本であれ外国であれ、プロレベルでボクシングに取り組む人間は、自分自身を日々の

過酷な規律と自己犠牲で追い詰め、衆目の前で栄光と嘲笑の双方の可能性に常に直面しているのである。ボクシングは貧困の下から現れ、貧困に向かうが、「無気力、無力感、無関心」に象徴される豊かな社会の混沌に見出される諸問題を考慮したとき、我々はもう一度「貧困」と「豊かさ」という言葉の意味について再考する必要があるのではなかろうか。

TABLE I

関西のプロボクシング・ジムの会長達の民族性一覧 日=日本人、在=在日人

明石	日	黒潮	?
アポロ	在	興和	?
尼崎	日	サカエ	日
尼崎亀谷	日	JM加古川	日「比国」
伊丹	?	進光	在
今福	?	新日本大阪	日
江坂	在	心和会山下	?
エディ・タウンゼント	?	泉北	在
江見	?	千里馬神戸	在
大阪帝拳	日	タイガ	在
大星	在	大鵬	在
大星モリガキ	?	中外	?
オール	在	塚原京都	?
鍵本エディ	?	白くろ	?
風間	在	ハラダ	日
金沢	在	姫路木下	日
川田	?	武蔵	?
神林健闘会	?	森岡	日
京都拳闘会	日	守口東郷	在
倉敷守安	?	八尾	日
クラトキ	日	陽光アダチ	在
グリーンツダ	日	六島	日

「.....」マネージャーのエスニシティ

REFERENCES

- ボクシング・マガジン編集部編。日本ボクシング年鑑2003。
東京：ベースぼる・マガジン社、2003。
- 康熙奉。在日はなぜスポーツに強いのか。東京：ベスト新書、2001。
- 康熙奉。日本のコリアン・ワールド。東京：中経出版、2001。
- 黒井克行。テンカウント：奇跡のトレーナー松本清司。東京：新潮社、2003。
- 岸田直子。リングの言霊。ネコ・パブリッシング、2002。
- 村越末男、編集。日本における差別と人権。大阪：解放出版社、2002。
- 後藤正治。リターンマッチ。東京：文？春秋、1994。
- 姜尚中。となりのコリアン。東京：日本評論社、2004。
- 原功。ボクシング名勝負の真実。東京：ネコ・パブリッシング、2003。
- 辰吉丈一郎。波乱万丈。東京：ベースボール・マガジン社、1994。
- 脇浜義明。ボクシングに賭ける。東京：岩波書店、1996。
- 高森朝雄、ちばてつや。あしたのジョー。東京：講談社コミックス、1989。
- 前田衷、編集長。ワールド・ボクシング。東京：日本スポーツ出版社、1999-2003。
- 仲尾宏。Q&A：在日韓国・朝鮮人問題の基礎知識。東京：明石書店、2003。
- 新渡戸稲造。武士道。東京：講談社インターナショナル、1998。
- 山岡淳一郎。ボクサー回流。東京：文？春秋、1997。
- 板坂元。日本の謎。東京：講談社インターナショナル、1996。
- 平田？、編集長。ボクシング・マガジン。東京：ベースボール・マガジン社、1999-2

- 吉田和明。あしたのジョー論。東京：風塵社、1992。
- 米倉健司。リングの虫：ボクシング一筋・四五年。東京：恒友出版、1995。
- Davies, Roger J. and Ikeno Osamu. *The Japanese Mind: Understanding Contemporary Japanese Culture*. Boston: Tuttle Publishing, 2002.
- Goodman, Loren. "Boxing, European," in *Martial Arts of the World*, Thomas A. Green, ed. Santa Barbara: ABC-CLIO, Inc., 2001.
- Goodman, Loren. *Toliaferro: Interviews with American Boxers* (unpublished manuscript) 1997-2003.
- Heller, Peter. "In This Corner..." New York: Da Capo Press, Inc., 1994.
- Ikeda, Keiko. *A Room Full of Mirrors*. Stanford: Stanford University Press, 1998.
- Katayama, Ifshin, McIvor, et.al., transi. *Talking About Japan: Updated Q&A*. Tokyo: Kodansha International, 2000.
- La Motta, Jake. *Raging Bull*. New York, Da Capo Press, 1997.
- Lie, John. *Multi-Ethnic Japan*. Cambridge: Harvard University Press, 2001.
- Merton, Robert K. *Social Theory and Social Structure*. New York: The Free Press, 1968.
- Mishima, Yukio. *The Samurai Ethic and Modern Japan*. Tokyo: Charles E. Tuttle Company, 1993.
- Rotella, Carlo. *Cut Time: An Education at the Fights*. Boston: Houghton Mifflin Company, 2003.
- Sammons, Jeffrey T. *Beyond the Ring: The Role of Boxing in American Society*. Urbana: University of Illinois Press, 1990.
- Schulman, Arlene. *The Prizefighters*. New York: Lyons & Burford, 1994.
- Sugden, John. *Boxing and Society: An International Analysis*. Manchester: Manchester

University Press, 1996.

- Toole, F.X. *Rope Burns: Stories from the Corner*. New York: The Ecco Press, 2000.
- Turner, Bryan. *Discovering Bodies*. London: Routledge, 1992.
- Wacquant, Loic. *Body & Soul: Notebooks of an Apprentice Boxer*. New York: Oxford University Press, 2004.
- Whiting, Robert. *The Meaning of Ichiro*. New York: Warner Books, 2004.
- Whiting, Robert. *You Gotta Have Na..* New York: Vintage Departures, 1990.
- Whiting, Robert. *Tokyo Underworld*. New York: Vintage Departures, 1999.

INTERVIEWS

- Akamine Yuji 赤嶺雄治 March 2001
- Baba Noriyuki 馬場紀幸、June, 2000.
- Barcelona, Jaime ハイメ・バルセロナ March 2003
- Chavez, Ivan February 2004
- Daio Yuki 大王勇希、June, 2000.
- Denkin, Martin マーチン・デーンキン June 2000
- Endo Yoichi 遠藤洋一 March, 2000
- Foley, Macka February 2004
- Furukawa Tsuyoshi 古川剛、November, 2001.
- Hiranaka Akinobu 平仲明信、January 2001.
- Hiranaka Naomi 平仲直美 January, 2001
- Hozumi Naotaka 保住直孝、August, 2002.
- Ichikawa Jiro 市川次郎 February 2004
- Isshiki Mitsuhiro 一色光洋、February 2001.
- Ikehara Nobuto 池原ノブト、January, 2001
- Kakazu Yuji 嘉数裕次 January, 2001
- Kan San-Fi 姜尚希 February, 2000
- Kashiwagi Daisaku 柏木大作、February, 2000.
- Kawaguchi 川口洋、September, 2000.
- Kida 来田法繁、February, 2000.
- Kito 鬼頭孝暢、October, 2000.
- Kondo Kenji 近藤謙二、June, 2000.

Laurent, Dennis デニス・ローレント January 2002
Li, Bulldozer ブルドーザー李 March 2003
Maeda Makoto 前田衷 January 2004
Matsumura Tairo 松村泰朗, April, 2000.
Matoba Kenichi 的場賢一 August, 2000
Matsuda Akio 松田昭雄 December 1999, April 2000
Morishita Keiko 森下啓子
Muguruma Takuya 六車卓也 October, 2002.
Naka Hiroki 中祐樹 June, 2000.
Nakai Mikio 中井幹夫 January 2004
Nakamura Chika 中村知佳 January 2000
Nakamura Eiji ナカムラ・エイジ December 1999.
Nakasai 中斎雅洋 2000.
Narita Kosuke 成田陽介 March, 2001.
Nishi Yuji 西祐司 April, 2001.
Nishizawa Yoshinori 西沢ヨシノリ February 2004
Nogami Shinji 野上真司 May, 2001.
Noguchi Daisuke 野口大輔 July, 2000.
Palmer, Kevin ケビン・パーマー January 2001
Quill, Frank フランク・クイール August 2000
Roach, Freddy February 2004
Roach, Pepper February 2004
Sato Michiya 佐藤通也 October, 2003.
Satsuma Nobunaga 薩摩宣永 May 2004
Seki Hiroyuji 関博之 2003
Senrime Keitoku 千里馬啓徳 November, 2001.
Senrime (Manager) 玉清美 May 2004
Sodesawa Tetsu 袖沢哲 February 2001
Stewart, Sammy February 2004
Takase Tsukasa 高瀬司 December 1999.
Takeda 武田高廣 August, 2000.
Tiger Ari (Eder Olivetti) タイガー・アリ February, 2001-January 2002.
Totsuka Takanobu 戸塚貴信 May 2004
Tsujiimoto Shouji 辻本章次 June, 2004
Tsunoda Yoshio 角田吉夫 October, 2003.
Ueda 上田晃司 2001.
Veeraphol Nakonluang Promotion ウィラボン・ナコンルアン・プロモーション December 2001.
Wakihama Yoshiaki 脇浜義明 November, 2003.
Wajima Koichi 輪島功一 January 2004

Wajima (Manager) 輪島 January 2004
Yano 矢野幸太 September, 2000.
Yasui Hajime 安井元 December 1999.
Yokozaki Satoru 横崎哲 April, 2002.
Yonekura Kenji 米倉健司, August 2002.
Yoshiyama Hideki 義山英喜

論文審査の結果の要旨

氏 名	Loren Seth Goodman
論 文 題 目	Hungry Spirit: Body, Narrative and Performance in the World of Japanese Boxing
要 旨	
<p>本論文は、主に参与観察とインタビューによる「語り」の収集という手法により、日本のボクシング界に生きる人々の実態を詳細に調査し、そのデータや資料の上に、社会学的枠組みによる分析を加えて構成したものである。</p> <p>論文提出者は、大阪、神戸、東京など各地のボクシング・ジムを訪れ、また自らジムのメンバーとなりながら、インタビューと参与観察を積み重ねることにより、フィールド・ノートや、録音テープなど膨大な量ののぼる資料を集積した。これらのデータの整理・分類から、実態として、どのようなことが日本ボクシングを考えるにあたって、特徴的観点となりうるかを解析し、同時に、この作業を社会学的理論枠組みとの関連を模索する理論研究とも並行して行った。</p> <p>本論文は全体として次のような構成をとって展開されている。</p> <p>1章「比較研究——日本とアメリカのボクサーたち」では、①語りのスタイル、②日米のボクシング・ジムの制度的・組織的相違の比較研究、③ボクサーの身体の統制、④アマチュア・ボクシング、⑤メディア、⑥経済的・社会的諸要因、⑦訓練方法、⑧トレーナー、⑨拳闘家的知恵、といった諸主題が取り上げられる。①の語りのスタイルでは、物語あるいは物語る行為における「私 I」の位置や「自我という概念」が検討される。②では、日米でのジムの広さの比較や、ボクシング組織の比較、アマチュアの位置づけの相違、メディアとの関連などが、分析される。③④では、ボクサーの体格の差異、ボクサーの身体がいかに造られるか、ということ、さらには、身体比較における「ステレオタイプ」という重要な論点が論述される。⑤⑥⑦では、ボクシングにおける「世界市場」という主題や、アルバイトとの関連の実態、などが分析される。⑧⑨では、減量、ジム間の争い、トレーナーの位置づけやオーヴァートレーニングといった諸論点が主題化される。</p> <p>2章「事例研究」では、トレーナー、競技者、審判員などといった、ボクシング関係者たちについて、主に5人の人物への詳細な聞き取り調査にもとづいた分析が展開される。</p> <p>3章「異物としての身体——ステレオタイプと日本ボクシングにおけるエスニシティ」では、①身体の「生産」、②身体の可視化、③「あしたのジョー」における外国人の身体、④日本におけるエスニシティ、といった諸論点が主題化される。①では、サッジェンの理論などを援用しながら、文化的「生産物」としてのボクサーの身体という主題が展開される。②では、フィジカルな「生産物」としての身体が論じられ、またハングリー精神に基づく肉体訓練ということがいかにボクサーないしボクサー志願の若者たちにとっての儀礼化された「集合精神」になっているかが検討される。③では、こうした語りには基礎付けとなる物語を与えたものと解釈できる漫画「あしたのジョー」と、そこに登場する外国人ボクサーたちの身体についてのステレオ・タイプ化された描写が主題化される。④では、以上のような分析をとおして指摘することのできる、日本社会におけるエスニシティの諸相を、ボクシングという切り口を介して鋭く提示している。</p> <p>4章「最大の媒体」——日本でいちばん大きな競技者たちの事例研究」では、日本のミドルウェイト級以上のボクサー7人へのインタビューをとおして、その語りの詳細な分析を行いながら、「同質社会」日本というイメージの再検討や、日本の中の地域性（地域的差異）の問題、エスニシティの差異やマノリティの問題など上述の諸問</p>	
主査記載 氏名・印	油井 清光 ()

が、鮮やかに分析・記述される。日本国内での東と西の違い、大阪 対 東京、その歴史や地理的分布といった題、沖縄出身の人々、いわゆる「在日」、「ハーフ」、外国人、一時滞在者、米軍軍属、などとといったさまざまな景をもつ「マイノリティ」が分析の主題とされ、より踏み込んで論述される。

社会学的な理論枠組みとしては、主に近年、社会学の先端的な領域で取りあげられることの増えてきた「社会学」に関連する文献を多く用いている。J.サッジェン (Sugden)、L.ワッカ (Wacquant)、B.ターナー (Turner) などである。例えば、ボクシングは「近代社会で許される最後の野蛮の実践」というサッジェン点や、「産業革命以降、ボクシングは常に政治や人種と関連付けられてきた経緯をもち、そのような背景からの試合に付与される象徴的重要性がスポーツの枠をはるかに凌ぐものとなる場合も多くなっている」というワッカの視点などを出発点としている。ワッカからは、他にも、「身体資本」という概念や、「身体改造」・クシングの実践、という観点も導入されている。さらに、そこでの基本的問題意識は、「ボクシング選手は、消費に象徴される現代のアメリカや日本の社会にあって、異質な存在として」じつは認識されている面があるという問題である。彼らのライフスタイルは、「自己犠牲と規律、そして独特の価値観・満足感にのっとった激肉改造を必要条件としたもの」であり、それがいかにして、この飽食と過剰消費の現代先進社会に存在しているのか、ということが根底にある問題意識である。飢餓や空腹ということの実際上の意味と、それが過剰消費社会の若者であるボクサーにとって持つ「儀礼的な意味」などが指摘され分析される。つまり、これは、本論文が表題とする、現代における「ハングリー精神」の存立の在りようとその謎が基本主題となってい

また社会学のより「古典的」な理論枠組みからは、マートンの「相対的剥奪」の概念とハングリー精神、③集団論、デュルケームの集合意識（現代のヒーローとしてのボクサー）や儀礼論、マスコミ論、なども援用する。さらに、主題的な実態分析としては、エスニシティとボクサー（ボクシング）との関わりや、ステレオタイプ化された外国人という身体分析が展開される。そこでは、単一民族説という「日本の神話」をふまながら、様々な性質を異にするマイノリティ・グループが、日本ボクシングの世界にいかにか多く存在した存在感を維持しているかが描かれる。

本論文では、フィールドワークによって集めた詳細なデータを、よりマクロな社会指標（出身社会階級、④の運営管理システム、その経済基盤、ポピュラーな英雄像としてのボクサーなど）との関連でも分析している。調査手法の中心は、選手たち自身による自己という物語の「語り」の分析にあり、また、地域・民族的アイデンティティや、世代的・時代的相違の考察、ボクシング以外の格闘技（例えば、柔道、空手、相撲など）との比をも視野に入れているが、最終的には、日米比較という大枠のなかで論文全体は構成されている。

綿密な調査手法による第一次資料の収集と、それに対する、今日のさまざまな社会学理論による分析といプロローグを組み合わせ、相乗効果をあげるよう配置されている。体系的理論枠組みと緊密に連動した形での資料分析の点などで、今後いっそう彫琢されるべき諸点はあるものの、本審査委員会は、以上の審査結果に鑑み論文提出者ローレン・グッドマンが博士（学術）の学位を授与されるに足る資格を有するものと判定した

審査委員

区分	職 名	氏 名
主 査	教授	油井 清光
副 査	教授	佐々木 衛
副 査	助教授	白鳥 義彦